

論文

“コミットメント” 流れに身を委ねること

～映画『霧につつまれたはりねずみ』の心理学的分析を通じて～

鶴田 英也

神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 准教授

“Comittment” Devoting oneself to the flow

through Psychological Analysis of the film “Hedgehog in the Fog”

Hidenari Tsuruta

*Department of Psychological and Behavioral Sciences
School of Human Sciences Kobe College*

Abstract

This Study, through the psychological analysis of “Hedgehog in the Fog”, presents the importance of devoting oneself to the flow and the unconsciousness and connecting with the reality in the psychotherapy.

Key words : unconsciousness, commitment, connecting with the reality

キーワード : 無意識、コミットメント、現実とのつながり

1. はじめに

本論はアニメ作品『霧につつまれたはりねずみ』を心理学的に分析するものである。本作はロシア（当時はソビエト連邦）の映像作家ユーリ・ノルシュテインが児童文学作家セルゲイ・コースロフとともに1975年に作成した10分のアニメ作品である。ユーリ・ノルシュテインはジブリの宮崎駿や高畑勲とも親交の深いロシアアニメの巨匠である。

筆者がこの作品を知ったのはこの作品を紹介する（確か教育評論家の）新聞記事で、その内容は、主人公であるはりねずみのおどおどした様子が、4月に新学年を迎える小学生が初めて新しいクラスに入る時の様子と重なるといった

ものだったように記憶している。早速興味を持ち、絵本もあるのだが筆者の場合はDVD『ユーリ・ノルシュテイン作品集』（2002年）を購入し、収録されている本作品を鑑賞したと

ころ、アニメ大国日本で見慣れているなめらか



ユーリ・ノルシュテイン作品集

でスピーディでカラフルなアニメと全く異なり、時代も時代ではあるのだが動きはスムーズでなく断続的でゆっくりとして、モノクロで哀愁漂うその作風にまずは驚いた。そして何よりも10分と短い内容の中に深層心理学的なエッセンス、もっと言うと無意識とかかわるという心の作業のエッセンスが見事に表現されていることを直感し、「これは使える!」と興奮したことを覚えている。その後色々分析を試みた後に、筆者が本学にて担当している学科の講義科目「イメージの心理臨床学」の中の1回を使って、本作品の視聴と解説を毎年行っているのだが、筆者としては、この内容を講義としてだけでなく、いつか論文の形で残しておきたいと考えていたので、今回はその機会を得たこととなる。

2. 作品のあらすじ

まずは作品のあらすじを紹介する。主人公のはりねずみヨージックは、ともだちのこぐまとお茶を飲みながら星を数えるという約束のため、こぐまの家に向かうのだが、途中霧の中に迷い込んでしまう。そこで白馬や巨木と出会ったりするのだが、お土産としてずっと持っていた木いちごを失くしてしまうことで一気に恐怖と不安に襲われる。結局木いちごはどこからか現れた猟犬が渡してくれるのだが、急いでこぐまの家に行こうとするヨージックは川に落ちてしまう。

だんだん沈んで流されるしかないヨージックは、「このまま流されよう」と覚悟を決める。すると、どこからか川の主のような生き物（おそらく大きな魚）が水の中から現れて、ヨージックを乗せて岸まで運んでくれる。そうしてヨージックは、とても心配していたこぐまのもとに無事辿り着き、一緒にお茶を飲みながら星を数えることができた、というものである。

3. 本作品の心理学的なテーマ

先に結論から言うと、本作品の心理学的なテーマの中核は、様々な形態をとる“水”とヨージックのかかわりに描かれている、ヨージックの内面、無意識とのかかわりの変遷にあると考えられる。

水の形態の変化は、①水たまり ②井戸 ③霧 ④川 ⑤お茶 となっている。最初の①水たまりと②井戸は特に対照的で、ヨージックを



ふくろうとヨージック

③霧の中へと段階的に誘っていく仕掛けがなされているかのようなのである。ヨージックが最初に出会う水は水たまりであり、そこにはヨージックの姿が映される。



水たまりに映るふくろう

そして、最初からヨージックとともに登場してくるのがフクロウである。フクロウは夜目の効く動物であり、無意識の世界の道案内人、伴走者のような存在であろう。そのフクロウの姿もヨージックのあと水たまりに映し出されるのだが、フクロウがその翼で水面をバシャバシャとかき混ぜると、水たまりに映る自身の姿も消えてまた映し出される。まるで目に見えるも

の、意識は見せかけのものでありかりそめのものであるとでも言いたげである。意識の否定がすでに始まっていると言える。ただ、そのことにヨージックはまだ気づいていない。

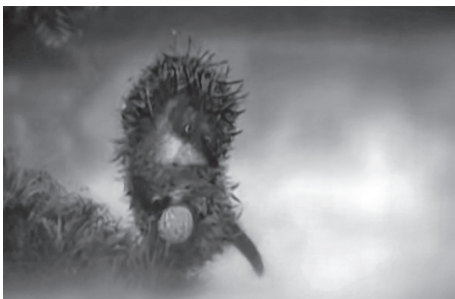
次にヨージックが会える水は井戸である。ヨージックが井戸の中を覗き込んで「ヤッホー」と叫ぶと、井戸の深さを示すかの如く少し遅れて井戸の中から同じく「ヤッホー」とこだまが返ってくる。水を見事に示しており、ヨージックが霧≡無意識の世界へと誘われていることがわかる。



井戸を覗き込むヨージック

ヒルマン（1989/1990）は「鏡から窓へ」という物議をかもした講演で、鏡に映る自己を見るというナルシズムから脱却して、窓を通して現実的な世界の中へと進むべきだと論じたのだが、その真意とどこまで一致するかは別として、この物語の水たまりから井戸、そして霧の中へという動きもまた、ヒルマンの言う方向性と大いに重なると言えるのではないだろうか。

そしていよいよ霧の中に、すなわち無意識の世界に入っていくのだが、ここで興味深いこと



霧の中に入るヨージック

に、そこで現れた一頭の神々しい白馬について、「面白いことを考えた」ヨージックはこうつぶやいている。



霧の中の白馬

「白馬が霧の中で横になったら、おぼれてしまわないのかな」。

霧はこの世界の背景、地のようなものになっており、白馬はそうした霧の世界を象徴化している存在として描かれていると考えられるが、ここでは二つの点が指摘できる。一つは、自身が霧の中でおぼれてしまうのではないかという不安があるにもかかわらず、それに対してヨージックは無意識的であり、その不安が白馬に投影されているという点である。

そしてもう一つは、その不安に無自覚でなおかつ白馬を半ばちゃかして脱価値化させているからこそ、ヨージックは無防備に霧の中へ入っていったという点である。ジブリ映画『千と千尋の神隠し』でも、千尋の両親が無防備なゆえにあちらの世界に入ってしまったのと同じで、意識が明晰で警戒心が強いままでは無意識とはコンタクトできないことを示していると思われる。



「このまま流されよう」

そして次の水の形態は川であり、ヨージックは川に落ちる。その前に巨木と出会って木いちごを失くしてパニックになる場面があるのだが、それについては後に触れるとして、前述したようにヨージックは「このまま流されよう」と覚悟を決める。すると川の主のような生き物が現れてヨージックを岸まで運んでくれる。まさにクライマックスである。

ギーゲリッヒ（2003）は、心理療法における重要な要素は、錬金術において浴槽に浸るように、水の中に飛び込むこと、そして浮くことを学ぶことだと述べている。それは、意識におけるあり方と無意識におけるあり方を、地上のあり方と水中のあり方に喩えて説明してくれていると考えてよいだろう。人間は地上では地面の上に立ち、歩き、走ることができる。地面がわれわれを支えてくれる。しかし水中で同じようなことをしようとすれば、たちまち溺れてしまう。すなわち水中では地上でのあり方、自我のコントロールをあきらめなければならない。立つことから、浮く、流される、あるいは泳ぐというあり方へとシフトチェンジしなければならない。それは水に身を委ねるということである。

すると、非常に不安定だった水が今度はわれわれを包み、支えてくれる土台となるのである。このシフトチェンジはまさに大きな勇気と覚悟を必要とするわけだが、ヨージックの「このまま流されよう」という言葉はまさにその覚悟を示す言葉であり、そしてそれに呼応するかのように川の主がヨージックを支え、導いたと言えるだろう。

しかしシフトチェンジと言うからには、それ以前はどうだったかという説明も必要であろう。それが巨木との出会いの場面である。ヨージックは霧の中に迷い込んだ末に、まさにこの世の中心、世界樹のような神秘的な巨木に出会う。ただ、直接木に触れることにははばかれたのか警戒したのか、ヨージックは地面に落ち



霧の中で出会った巨木

ている枝（おそらくこの巨木の枝）を拾い上げ、それを探知機や杖のようにして巨木に間接的に触れる。その枝はおそらくその巨木の一部だったからこそ媒介の役割を果たすのだろう。そして直接触れられないこの間接性こそ巨木の神性を証明するものかもしれない。

そしてヨージックは、枝を拾う際に代わりに木いちごを地面に置くのであるが、この場面が



木いちごを手放すヨージック

まさに象徴的である。木いちごはこぐまとお茶を飲みながら星を数える際の手土産であり、言ってみれば「現実とのつながり」を象徴するものである。他にも「現実とのつながり」を象徴するものとしては、なかなかやって来ないヨージックを心配して何度も「ヨージック！」と呼ぶこぐまの声が挙げられる。その呼び声が聞こえているということが、現実とのつながりがまだ保たれているという安心をもたらしものなのだろう。

いずれにせよ、この期に及んで現実とのつながりを象徴する木いちごを手放すことの意味がいかに大きいかは、手放したことに気づいたヨ

ージックの尋常ではない狼狽ぶりから推測される。ヨージックは現実とのつながりを絶やさずにいたかったのだし、必死に地上のように立ち続けようとしたのである。だからこそ、それが損なわれてしまう不安は測り知れないものがあるし、逆に言うと、その喪失や犠牲こそが、巨木との出会いの根拠となっているとも言える。そんな、現実とのつながりを失うことにこれほど怯え、狼狽していたヨージックが「このまま流されよう」という境地に至る、その過程がいかに壮絶なものであったか、もうお分かりいただけるのではないだろうか。

しかし、ヨージックがこの境地に至る伏線としてぜひとももう一つ触れておきたいのが、木いちごを渡してくれた猟犬である。ヨージック



木いちごを渡す猟犬

は巨木と出会った代償として、現実とのつながりを象徴する木いちごを失ってパニックに陥っていたのだが、どこからともなく猟犬が現れてその木いちごを渡してくれる。この猟犬、猟犬と言うだけで飼い主である人間の存在を感じさせるのだが、映像の中では実際に飼い主の口笛も聞こえてくる。またこの猟犬はこの作品の中で唯一カラーで描かれている。そうしたもろもろの要素もまとめて、この猟犬もまた現実とのつながりを象徴するものと考えられる。

ヨージックは意図せずして木いちごという現実とのつながりを失うことを代償に、巨木との感動的な出会いを体験する。そしてヨージックは木いちごを失った（＝現実とのつながりを失った）ことに気づいてパニックになるのだが、今度は木いちごはどこからか現れた猟犬によっ

て手元に帰って来る。こうした意図せずして流されて辿り着いた体験こそが下支えとなって、ヨージックが川に落ちてしまったときには、今度は「このまま流されよう」という主体的な態度を示すことができたのではないだろうか。

そして最後の水の形態はお茶である。ヨージックはこぐまのところに無事辿り着き、一緒に



こぐまとヨージック

お茶を飲むこととなる。ヨージックはまだ霧の世界の出来事の余韻を引きずって半ば放心状態である一方、こぐまはいかにも人の良さそうなキャラよろしく、いかに心配していたか、いかにこの時間が大切であったかをまくしたてている。そしてヨージックは言うのである。「やっぱりこぐまと一緒にいいな」。

これは単に、非日常的なアクシデントに見舞われたけれども無事、こぐまとお茶を飲みながら星を数えるという平凡な日常に戻ることができた、というお話ではないと思われる。

ジブリ映画『千と千尋の神隠し』でも、千尋のお湯屋での体験の前と後とではやはりその成長ぶりが顕著であるように、ヨージックにも霧の世界の体験前後である種の変化があってこそ、こぐまと過ごす体験の意義がその輝きを増したのだと思われる。そして、霧の世界を脱してお茶を飲むということは、ヨージックが水の世界から外に出て、水を対象化し、かつ水を内面化することであり、と同時に、そうすることのできる自我をあらたに獲得していることを意味していると理解することができるのではないだろうか。

しかし中心的なテーマはやはり、ヨージックが川に身を委ねる、流れに身を任せる、まさにコミットメントがあってこそ、それが支えられる、包まれる、そして運ばれるという体験につながっていくということだろう。それは極論すれば、対象は何であれとにかくコミットすること、コミットメントそのものが土台となってその人を支える、ということなのかもしれない。

4. まとめ

ここまで『霧につつまれたハリネズミ』の心理学的な分析を進めてきたが、この作品分析から心理療法に活かすことのできる点を挙げるとするならば、以下の二点にまとめられよう。

① コミットメント

無意識を想定した深層心理学や心理療法においては、意識や自我にとっては他者である無意識というものとどうかかわり、その力をどう活かしていくかが肝要である。その無意識がギーゲリッヒ（2003）によっても今回の『霧につつまれたハリネズミ』によっても水に喩えられ、その水とどうかかわっていくが示されたわけだが、ヨージックが身をもって示してくれたのは「流れに身を委ねる」ことであった。この流れというのは言うまでもなく、無意識の作用を含む、様々な出来事から連なった、偶然的な、それゆえ必然的とも言える全体の流れである。布置constellationと言い換えてもいいだろう。

ただしここで大切なのは、アクティブactiveに、能動的に「流される」という矛盾した態度である。ここの理解がなかなか難しいところではあるが、ヨージックは初めから能動的に「流されよう」としたのではない。受動的に流され翻弄され、そして流されまいとあがいてもがいた末に、あきらめの境地に至って、「流されよう」と覚悟したのである。この境地においてこそ、無意識との出会い、無意識の支えが生じ得ることを、本作品は見事に示している。そして

筆者がコミットメントと呼ぶのはまさに、受動的にも能動的にも流されていくその過程全体である。

筆者がかつて『根づき』の心理学～その論理性と動きに着目して～という論文で、アマテラスやナルキッソスを例に挙げて示したのも同様のことである。すなわち図1に示すように、心理学的に根づくということは、意識（みずから）が徹底して行き詰まり衝き当たった末に、無意識（おのづから）と出会い、無意識に貫かれて転回する、言い換えれば「みずから」「おのづから」となるということである。ヨージックが川の主に岸に運んでもらったのも、まさに同様の転回点だったと言えるだろう。

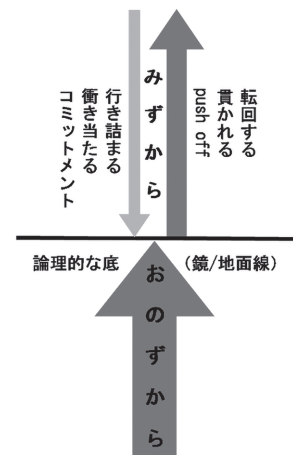


図1

② 現実とのつながり

もう一つの重要なポイントは、手土産の木いちご、こぐまの呼び声、猟犬などによって示されていた、現実とのつながりである。この現実とのつながりが心理療法においても内面との関わりを守る役割をもつものとして重要視されていることは周知の事実であるが、これを理解することも実はそれほど簡単なことではないということが、この作品から示唆されている。というのも、本稿が分析してきたヨージックの一連の体験を可能にした要因が、現実とのつながりの喪失でもあったからである。

しかしやはりそのことをもって、現実とのつながりが否定されることも軽視されることもないだろう。あくまでも現実とのつながりを保とうとする意識の働きは重要なままであり、時間や場所や料金といった枠を維持することも変わらず重要である。本作品で示されたのは、そうした意識の働きがあっても、いやそれがあってこそ、それを超えて起こってくる出来事の意義であり、なおかつそれに身を委ねることの意義である。これも結局のところ、①で示したコミットメントにつながっていく話だと言えよう。

最後に、こうした事例検討ならぬ作品検討が個々に新たな固有の知見をもたらすことこそ、臨床心理学の特徴であり面白さと言えることを再認識して、本稿を閉じる。

引用・参考文献

- Giegerich, W. (2003) 治療において何が癒すのか (河合俊雄訳) こころの科学, no109, pp.114-125.
- J.Hillman, "From Mirror to Window.Curing Psychoanalysis of IstNarcissism", Spring 49, Dallas, 1989, pp.62-75, (磯前順一・和田光俊共訳, 1990) 鏡から窓へ ―精神分析の持つナルシズムを治療する―ユング研究, no1, pp.43-58.
- 鶴田英也 (2020) 「根づき」の心理学 その論理性と動きに着目して 箱庭療法学研究第33巻第1号, pp.65-74.
- ユーリ・ノルシュテイン作品集 (2002) ©2002 Film By Jove Inc.in assosiation with Soyuzmultfilms studio

